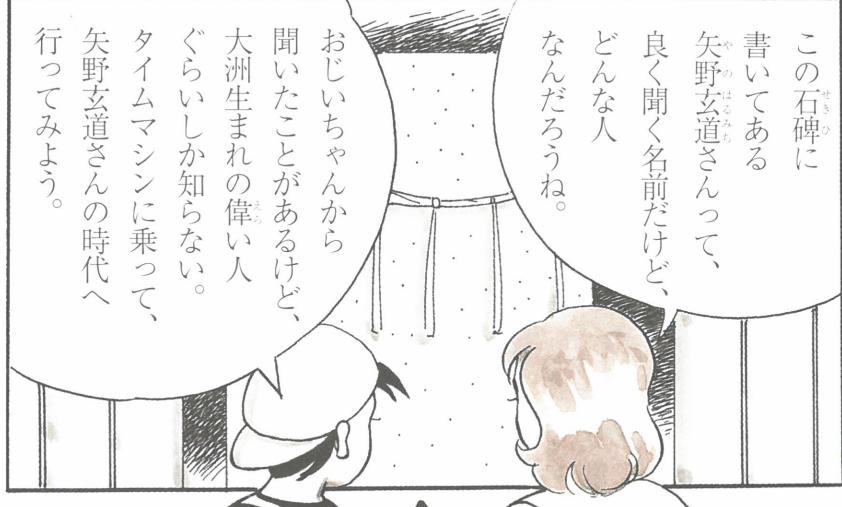
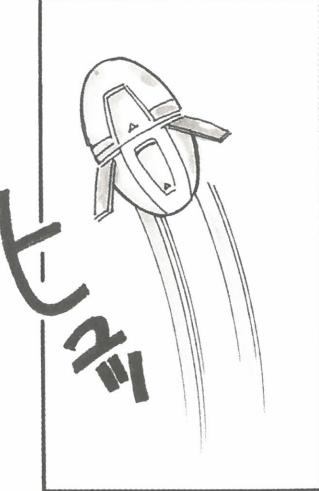
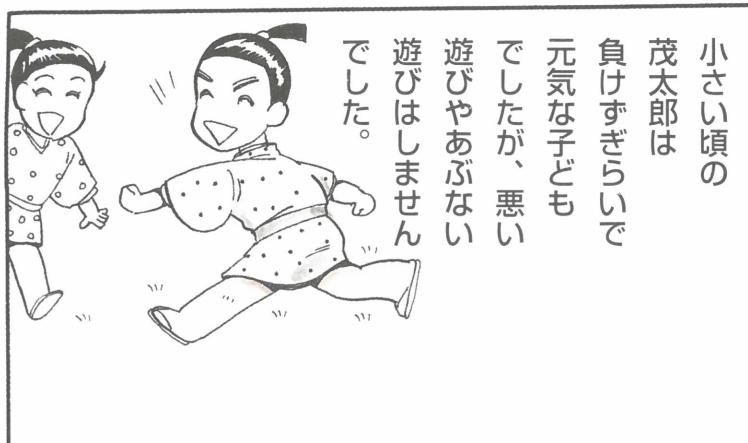


矢野

はみち 玄道

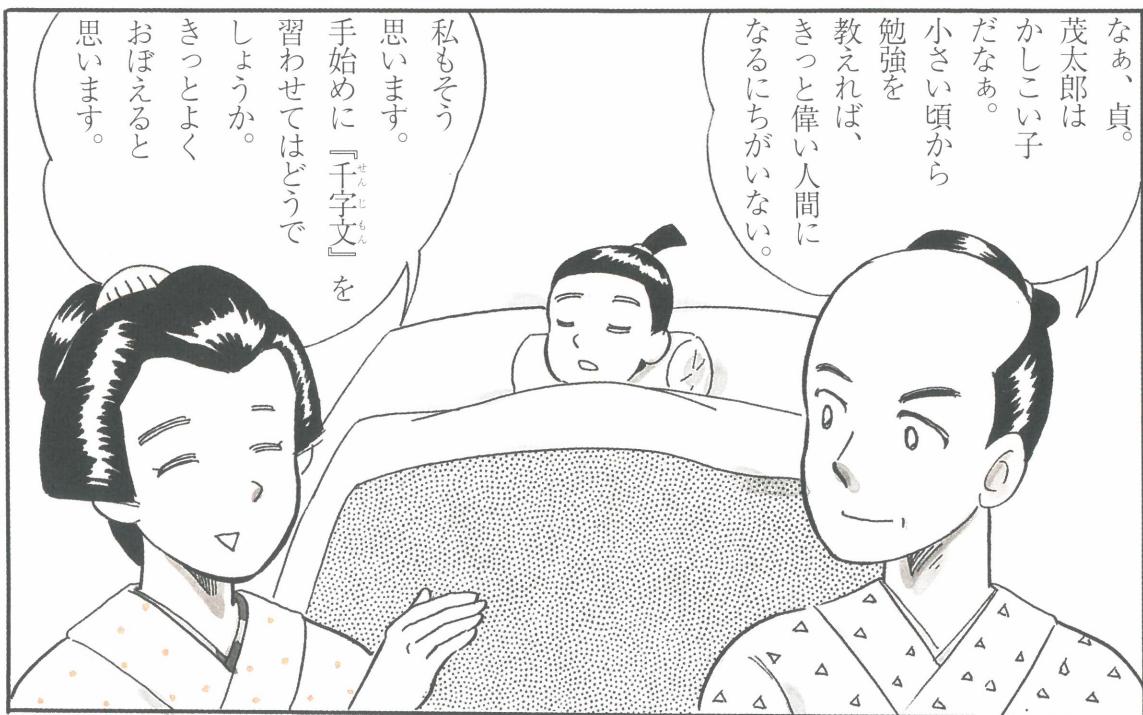


オキヤ





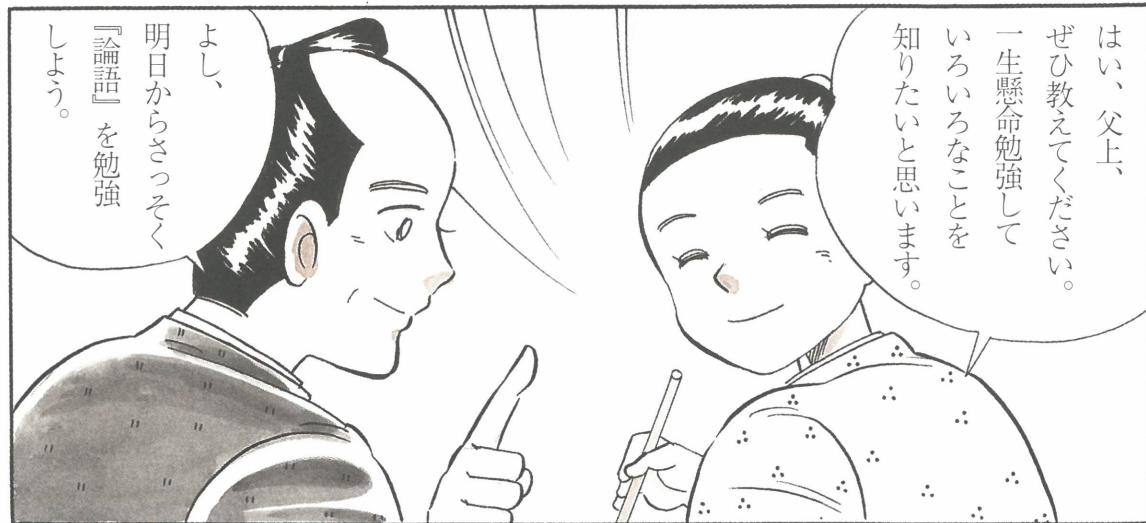
この花はさつき、しようぶ…。
ねえ、もつともつと教えて。



茂太郎は五歳の頃まで毎日のように、おばあさんや母のひざの上で千字文の読み方を習いました。小さい茂太郎には、その千字文の意味はわからませんでしたが、一生懸命努力をして、みるみるうちに読めるようになります。

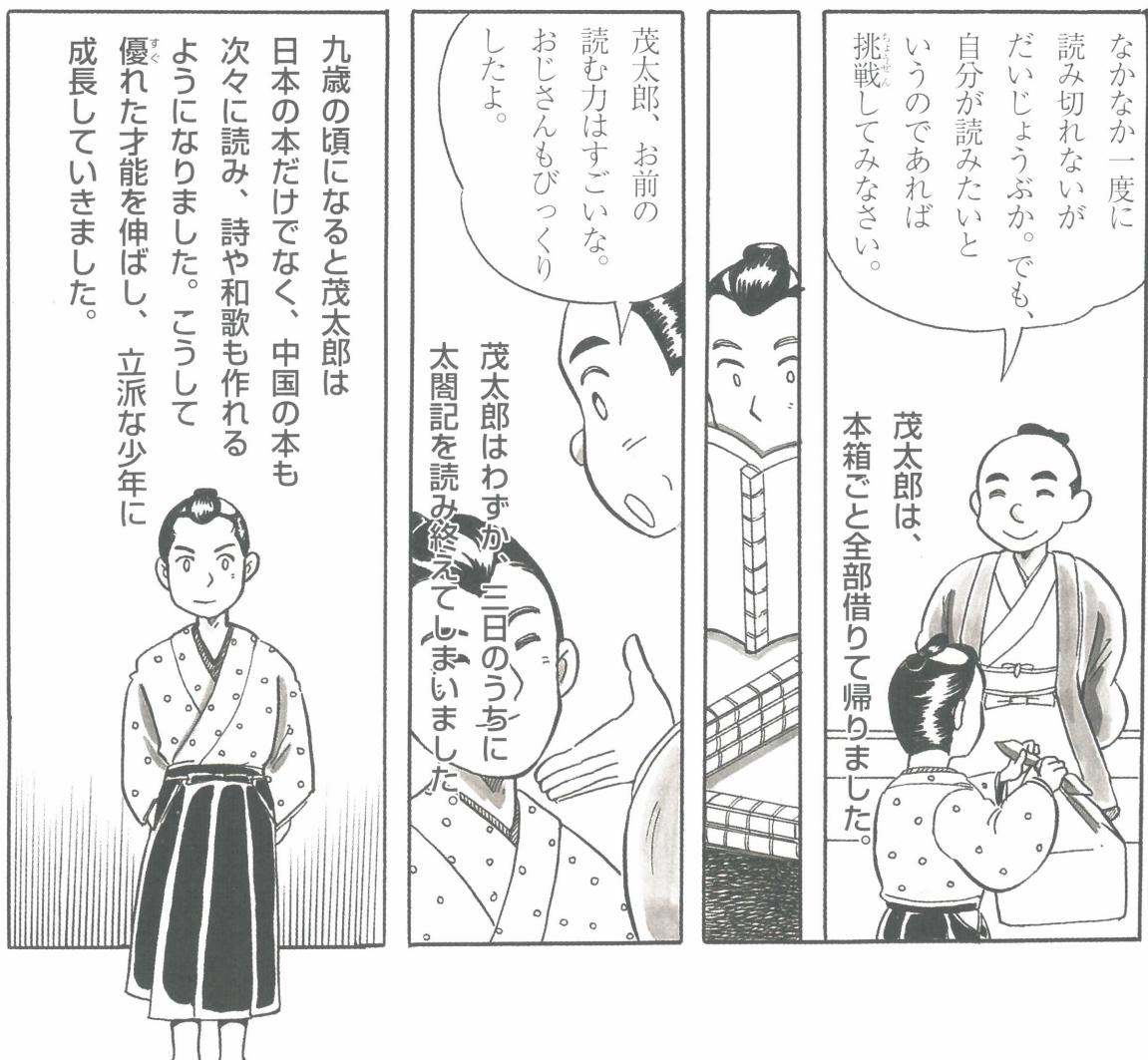
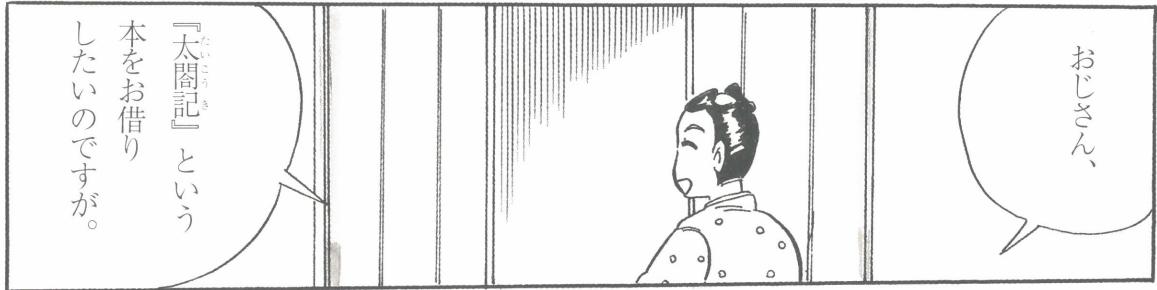
『千字文』は、昔中国で作られた千字の詩です。有名な書家によって書かれたのが伝わり、いまも習字の手本として使われています。

五歳の頃、茂太郎は父について習字を習い、だんだん上達していきました。



はい、父上、
ぜひ教えてください。
一生懸命勉強して
いろいろなことを
知りたいと思っています。

茂太郎は
父について熱心に
勉強し、本を読む力と
たくさんの知識を
身に付けました。



茂太郎の父道正は、

その頃の武士が修めていた中国の
孔子の教えをまとめた学問

「儒学」を早くから学んだり、
日本の古い本や考え方を
研究していました。

茂太郎十五歳

これからのお前にとって
大切なことは国学を

勉強していくことだ。

国学の勉強に励み、
本を書いて後の

世の中に残すよう
心がけるがいい。

私はとても

本を読むのが好きですし、

今まで読んできたものから
多くのことを学びました。

父上が
おっしゃるよう、
国学の勉強を
一生懸命

がんばります。

そんな父に茂太郎も
影響を受け始めていました。

茂太郎、
お前はとても
かしこい子だ。

天保十一年(一八四〇)、

十八歳

茂太郎、

国学を志していく
ためには、もつと
深い学問を

勉強していかなければ

ならない。松山藩の

明教館に、日下伯巖

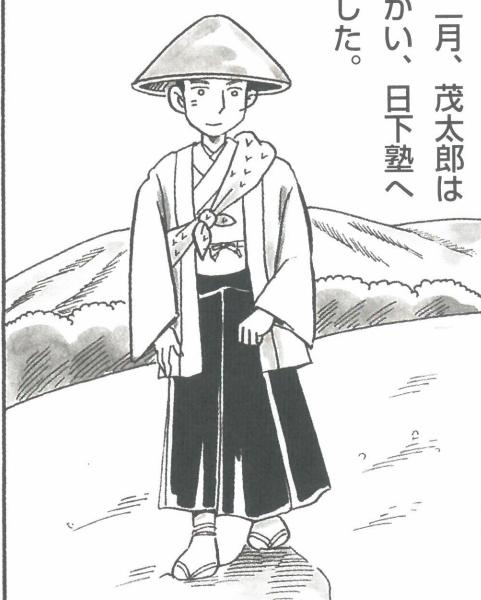
というすばらしい先生が
いらっしやる。どうだ、
先生が開いておられる
日下塾に入門して
みないか：

私ももつと
勉強して、国学の
基礎づくりを行いたい
と思っていました。
父上がおっしやる
通り、
がんばってみます。

茂太郎、だいじょうぶ
ですか。何か困った
ことがあつたら
帰つて来ていいのですよ。

この年の一月、茂太郎は
松山へ向かい、日下塾へ
入門しました。

だいじょうぶです。
できなくなるのでは
ありません。勉強したら
帰つてきます。



茂太郎は
伯巣先生から
学問や書道
を学びながら、
読書に
励みました。

そして生まれつき
丈夫でなかつたので
武芸にも精を出し、
体をきたえました。

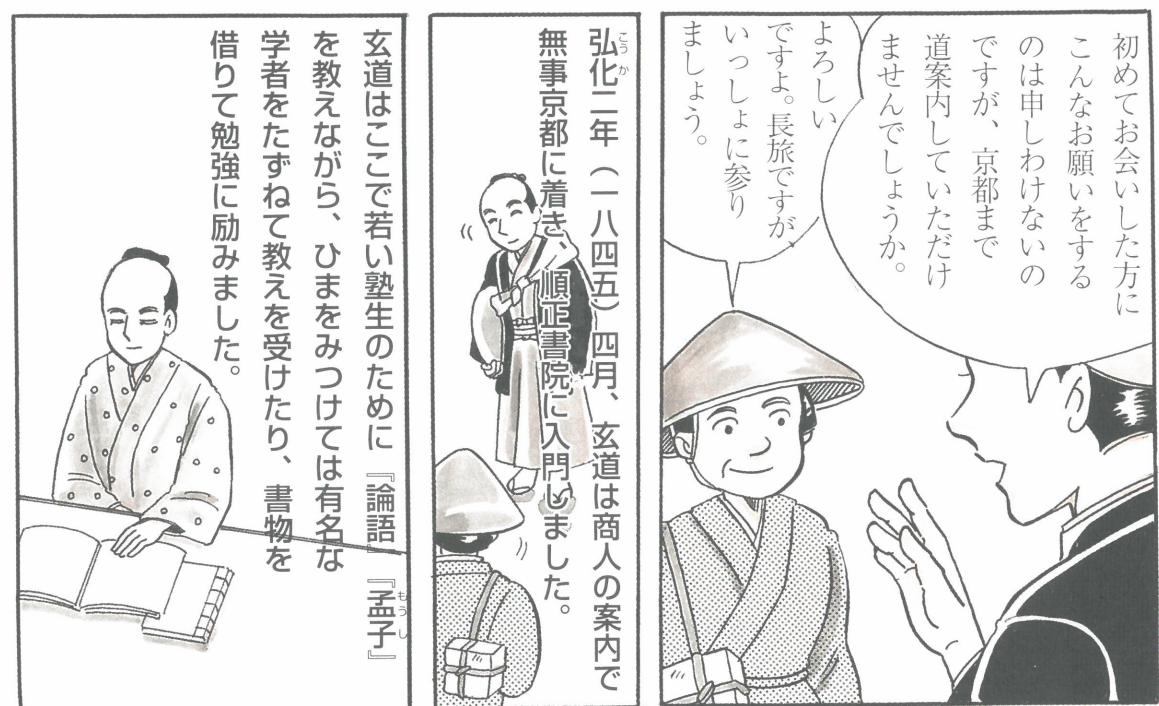
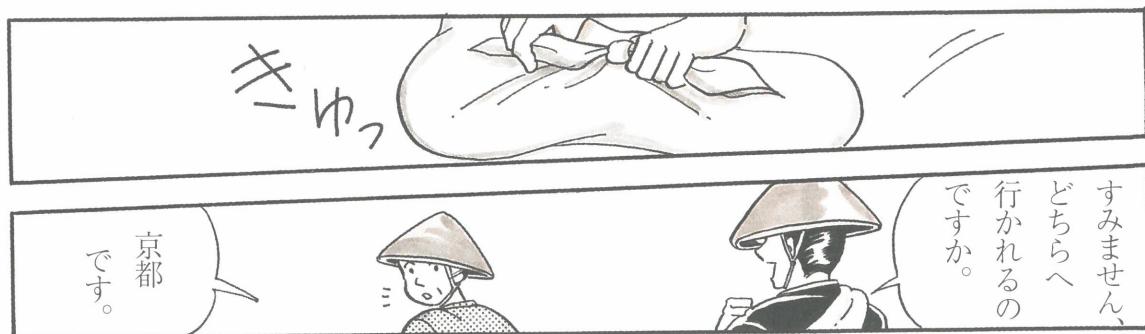
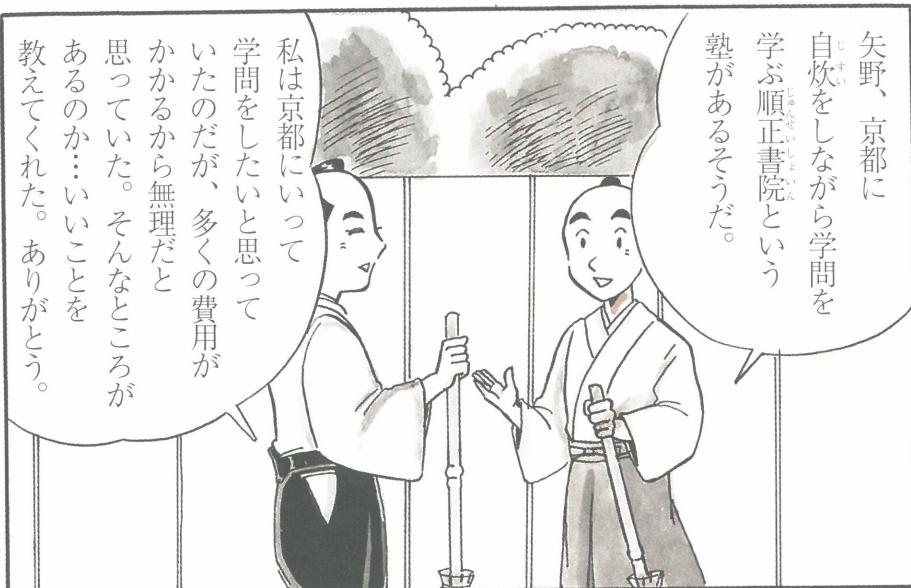
矢野茂太郎は今にきつと
日本を代表する立派な学者に
なるにちがいない。

はい、先生。

茂太郎のすぐれた
読書力と学問への志の
強さは、ただおどろくばかりだ。
これからもさらに学問に精を
出して、国のためにつくせる
立派な学者になるよう
がんばりなさい。

茂太郎は伯巣先生から
大きな影響を受け、
学問の基礎を学びました。

二十一歳になつた茂太郎は名前を
「玄道」に変え、これからも
さらに国学の研究に励んで
いこうと決心していました。



玄道は二十二歳の時、
日ごろから
あこがれていた江戸の
平田塾をたずねました。

しかし、小さい頃、
父から聞かされていた
あこがれの平田篤胤は
三年前に亡くなつて
いました。

玄道のふるさと大洲から
来た平田鍊胤が後を
ついでいました。



玄道は平田塾での学問だけにこだわらず、幕府の学校である昌平黌に入り、佐藤一斎などの教えを受けました。

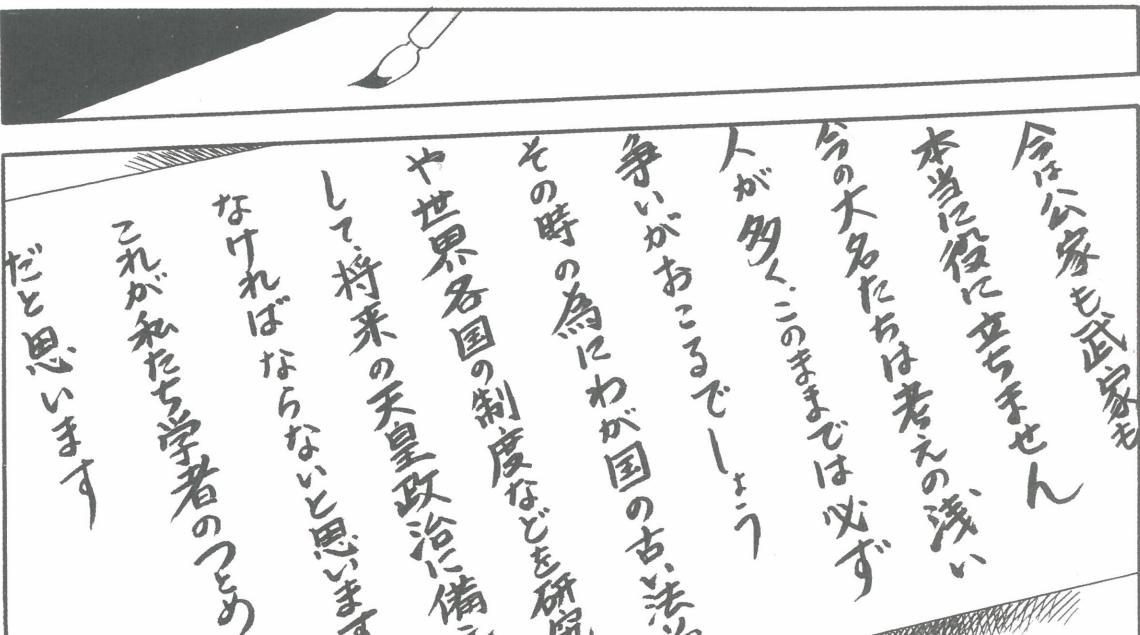
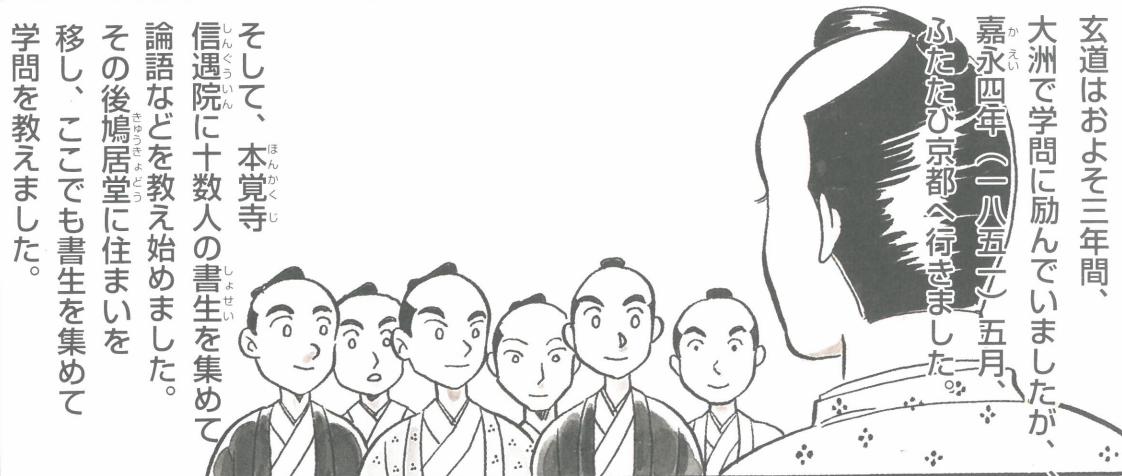
また、江戸でなければ見られない書物をさがして読んだり、同じ門人と議論を行いました。



弘化四年
(一八四七)







玄道は明治維新の十四、五年前

江戸幕府が天皇に代わって

そうだ、天皇が

政治をするところで

朝廷に対する力を持つて

薩摩藩（現在の鹿児島県）の

から新しい天皇の世の中が
来ることを予言し、
また国の政治を
天皇に返すことを
願っていました。

政治をすることで、天皇の地位は
おどろえていった。これでは天皇を
中心として日本の国が成り立つて
きた歴史の尊さは忘れられて
しまう。そのためにも早く

国学を中心として、漢学や洋学を
学べる学校を作り、日本の
進むべき道を研究する人物を
育てるべきではないだろうか。

そうだ、天皇が
政治をするところで
朝廷に対する力を持つて
薩摩藩（現在の鹿児島県）の
殿様にお願いしよう。



玄道は薩摩藩に皇学所を建設してほしいということを何度も申し入れましたが、ながなが実現しませんでした。

慶應元年（一八六五）、
玄道四十四歳

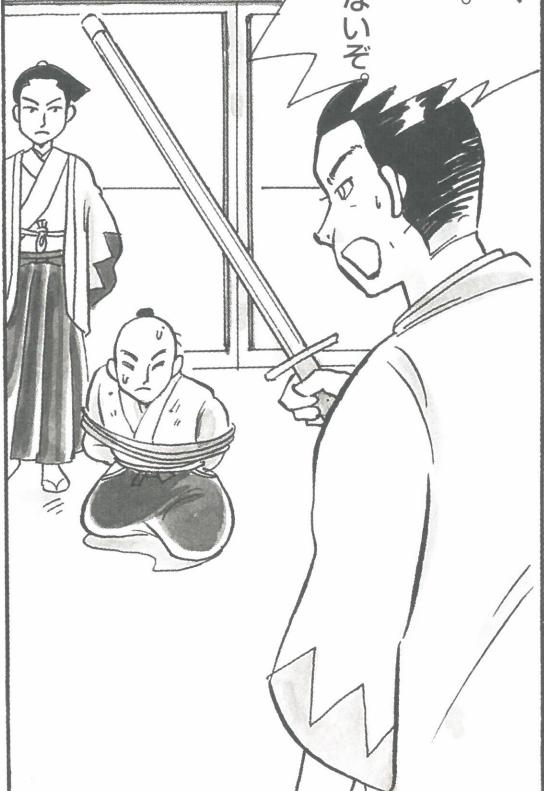
幕府が行つていた政治に反発していた
玄道は、京都で幕府のために動いていた
近藤勇らのひきいる新撰組にとりわれ

ました。

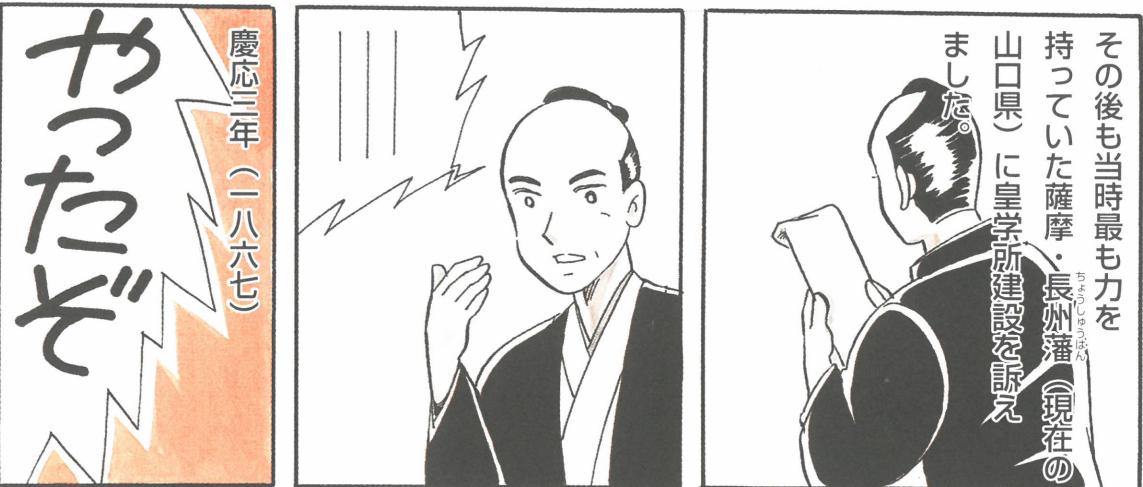
玄道が新撰組にとりわれている時、
玄道の考えに賛同した人々は、
ろうじくから玄道を助けだす
運動を行いました。

うう、なんといふことだ。
私はこれから時代のことについて言つて
いるだけなのに…。

なぜ、幕府にはむかうんだ。
決してお前のためににはならないぞ。



幕府はその人たちの熱意に負け、玄道を解放しました。



慶應三年（一八六七）十月十四日、

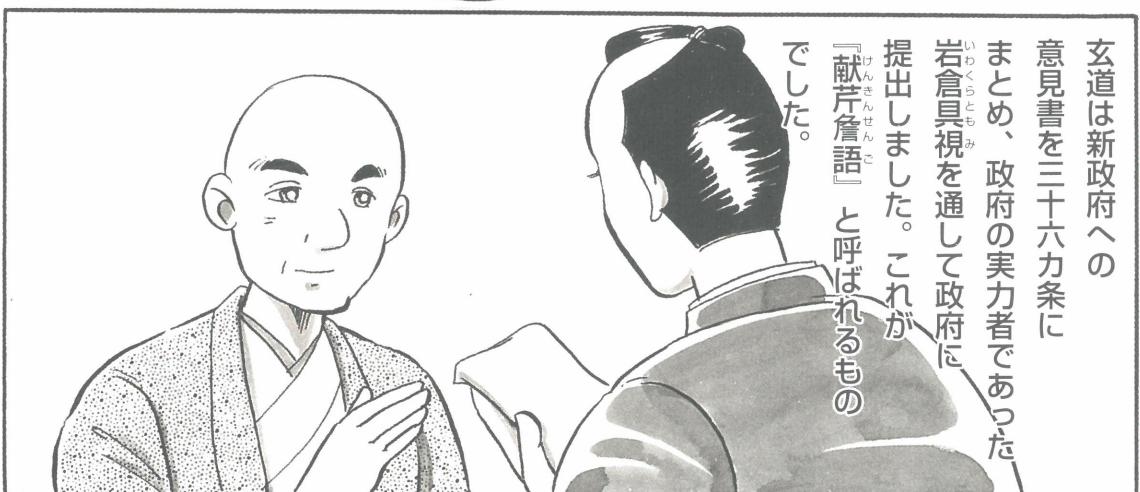
徳川幕府は国の政治を朝廷に

返すことを申し出ました。

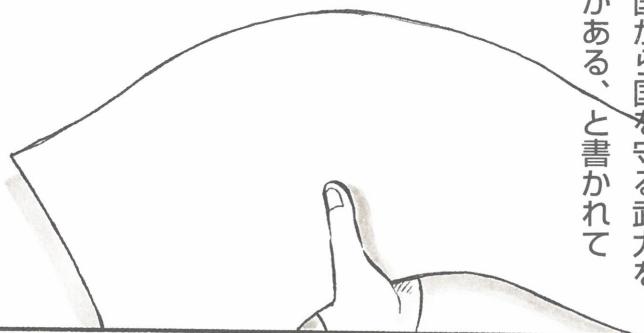
朝廷は翌日これを認め、

十二月九日に天皇を中心の政治を

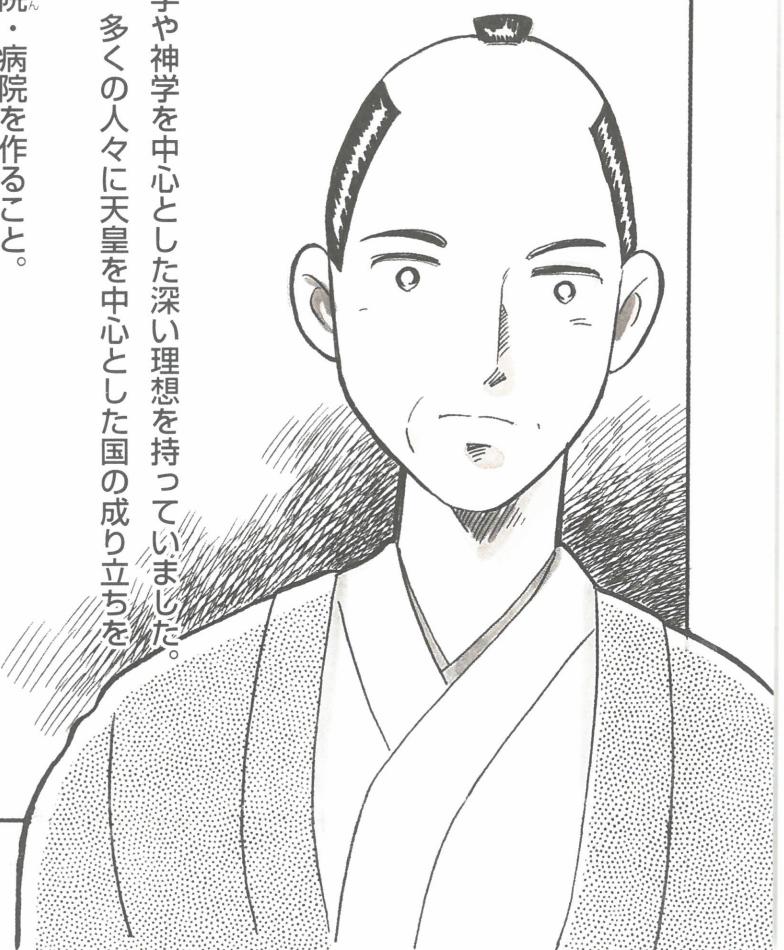
していくことを明らかにしました。



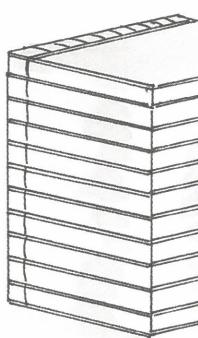
献芹<じんしん>語には、日本を治めるには、第一に祭祀<さいし>を重んじ、祭祀と政治を一つにすること、第二に国民が安心して暮らせる政治を行ふこと、第三に国内の平和を守り、外国から国を守る武力を持つ必要がある、と書かれていました。



その他にも玄道は国学や神学を中心とした深い理想を持つていました。
一、都に大学を建て、多くの人々に天皇を中心とした国の成り立ちを教えること。
二、貧院・幼稚院・教会・病院を作ること。
三、政府の役人の配置^{きばい}はかんたんにすること。
四、身分の高い人がだらしないことをいましめること。
五、家族の関係を記録し、田畠のきまりを改めるなど。
六、裁判^{さいばん}の決まりを作り、正しく判するなど。
七、軍隊^{ぐんたい}の決まりを作ること。
八、地方の政治の仕組みを同じにすること。
この理想からも、玄道が日本のことを中心配して、政治の仕組みの改革^{かげん}に心をそそいでいたことがわかります。



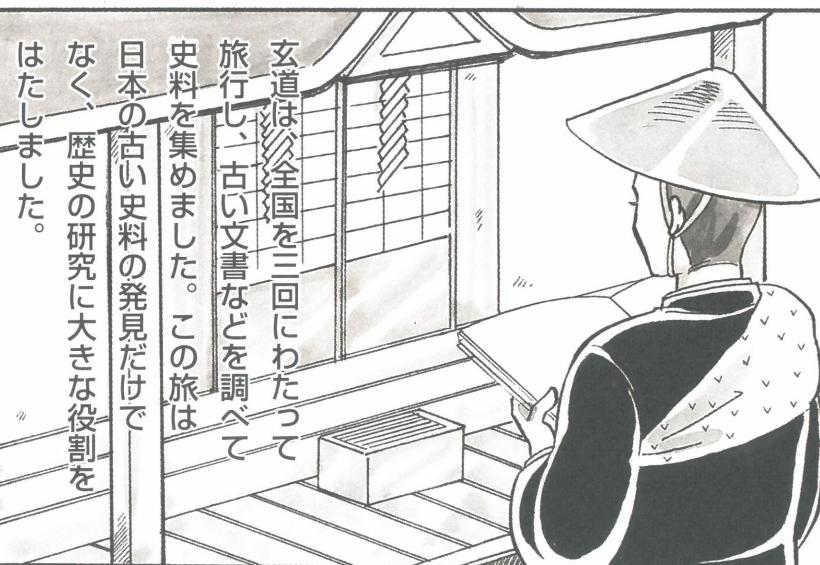
玄道は明治八年（一八七五）、政府から『古史伝』の完成をたのまれました。



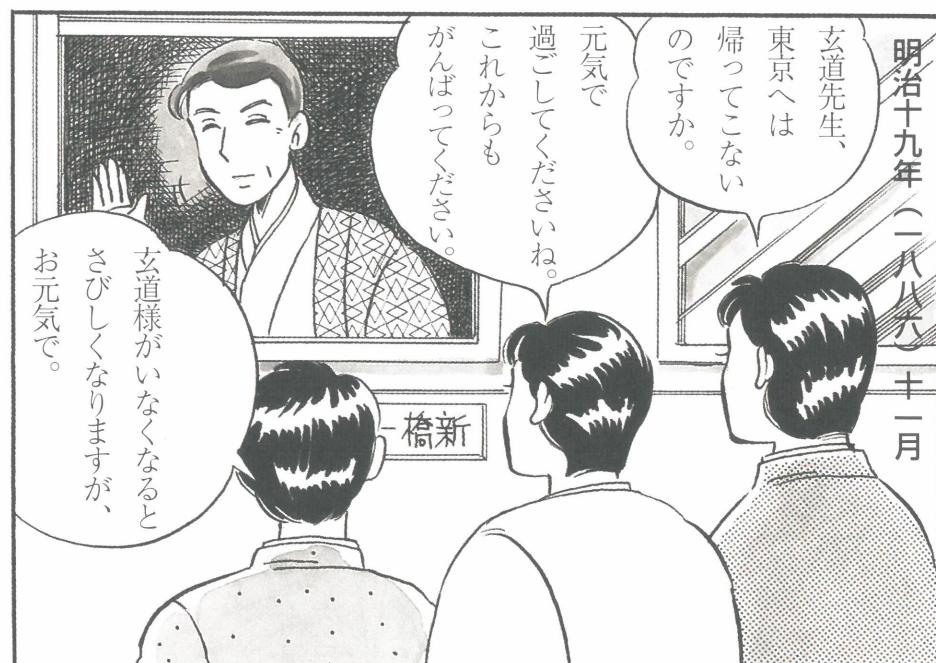
忙しい中、毎日書き続け、明治十九年（一八八六）十月に二十九巻から三十七巻までを完成しました。この仕事により、玄道は平田篤胤の神道の考え方を引きつぐ者としてみじめられるようになります。



また明治十四年（一八八一）には、政府に玄道が意見書の中で述べていた地方の古い書物を調べて、各地のくらしや歴史を書いた本を作ることが必要であるとまとめられ、三ヵ年計画で史料を集める仕事を任されました。



玄道は全国を二回にわたって旅行し、古い文書などを調べて史料を集めました。この旅は日本古の歴史の研究に大きな役割をはたしました。

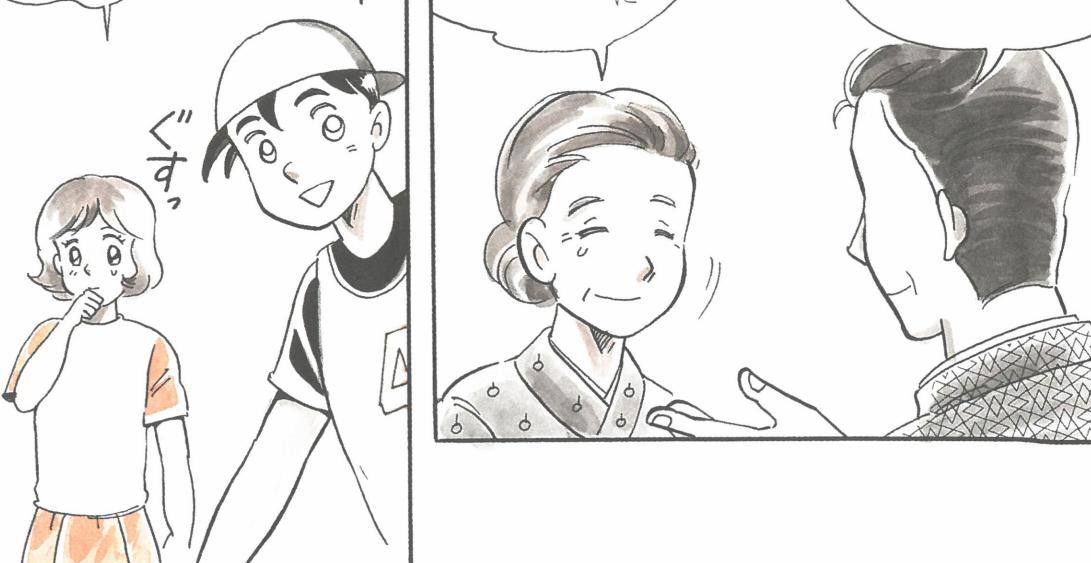
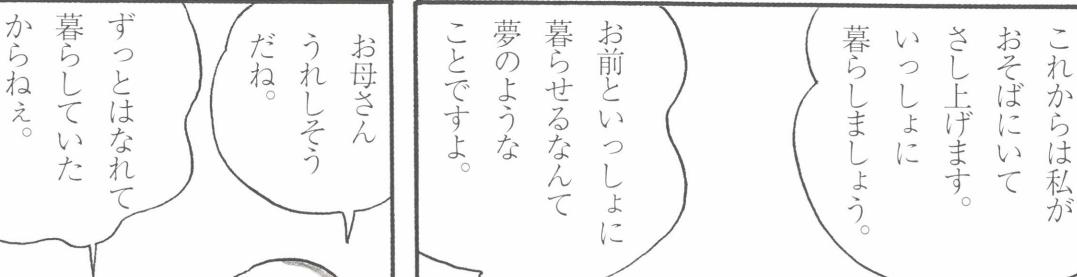


明治十九年（一八八六）十一月

しんばし

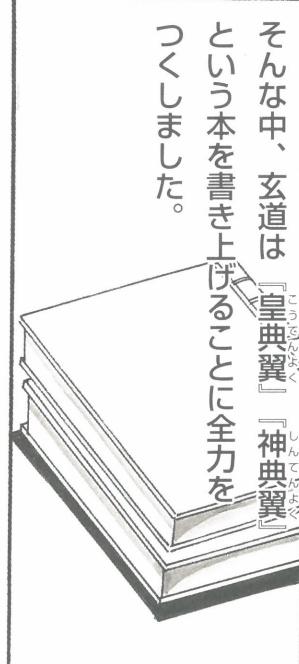
皆さん、ありがとうございます。
またお会いでできる
日があると思います。
その日が来ることを
楽しみしております。
さようなら。

玄道は横浜から船で神戸まで
行き、そこから瀬戸内海通いの船に
乗りかえ、四日後、大洲に
帰りました。

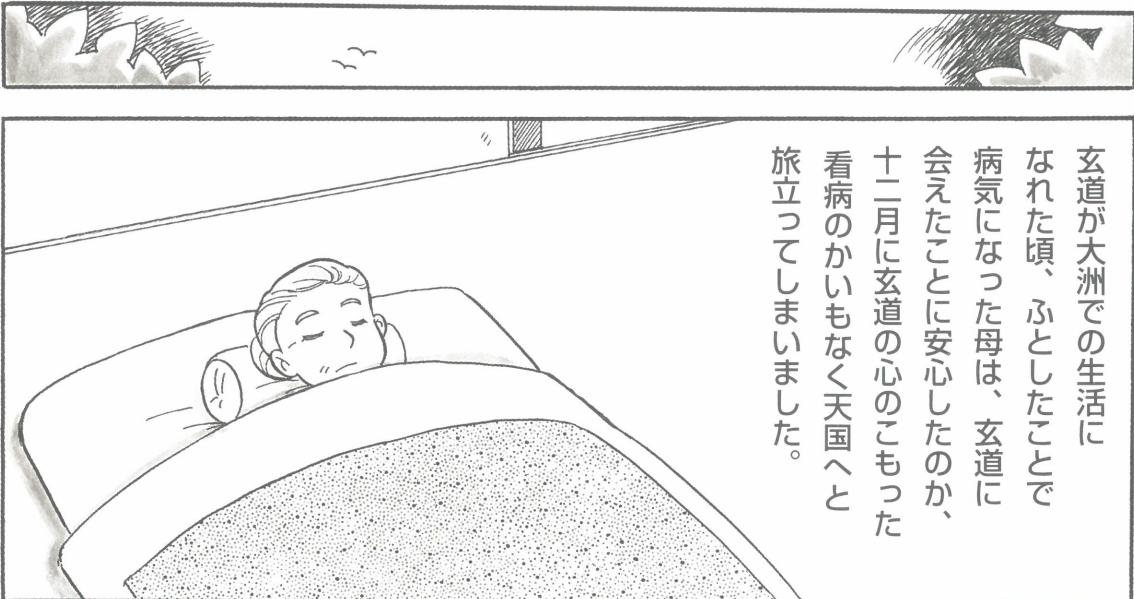


大洲の阿藏有松での
くらしは今までの
忙しさから解放
されて、自由で
のんびりしたもの
でした。

そんな中、玄道は『こうとうさんぶく』『しんてうさんぶく』
という本を書き上げることに全力を
つくしました。



玄道が大洲での生活に
なれた頃、ふとしたことで
病気になつた母は、玄道に
会えたことに安心したのか、
十一月に玄道の心のこもつた
看病のかいもなく天国へと
旅立つてしましました。



明治二十年（一八八七）
玄道六十五歳



しかし、母の死の悲しみからか、
玄道自身も三月から
体が弱り、元気をなくして
しまいました。

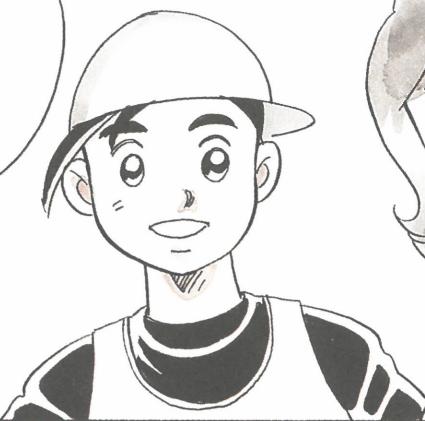


その後も玄道の体は弱り、
五月十九日の夜、弟、親せき、
知人、門弟たちに
見守られながら、
太十五年間の人生の事を
おろしました。





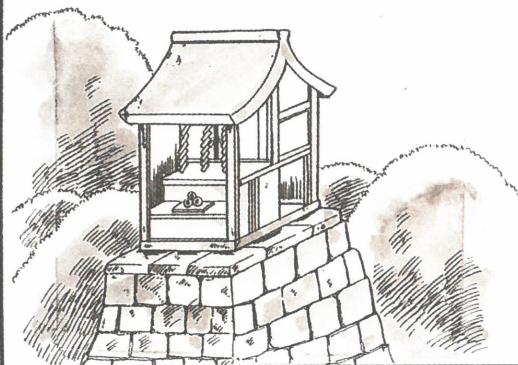
玄道さんは
やさしい心を
もつた人
だったのね。



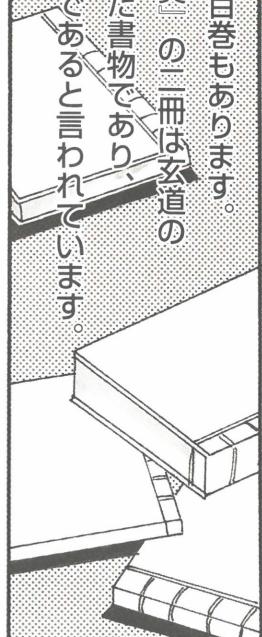
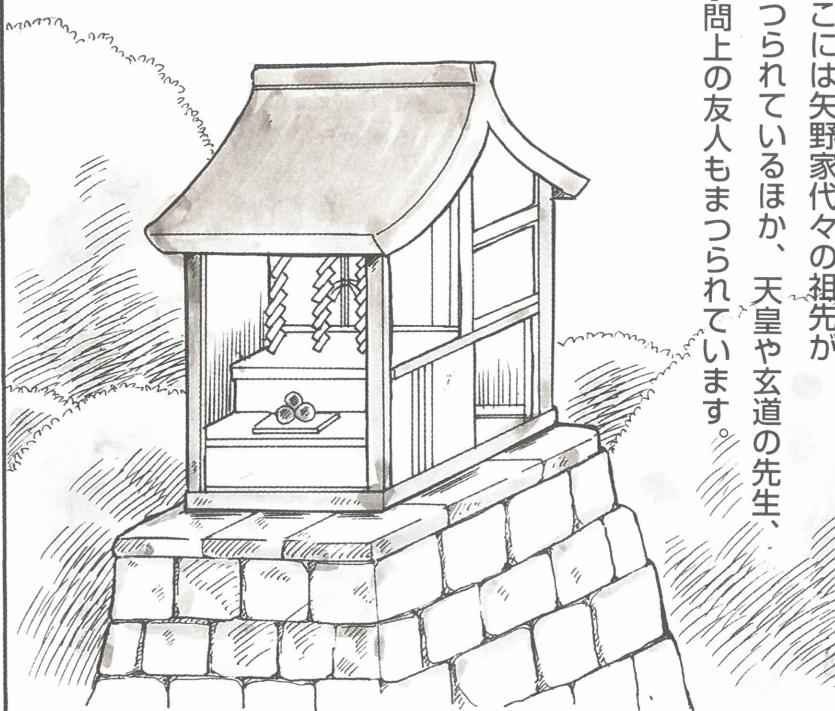
僕達も勉強に
がんばり、人を
思いやる心を
身につけなくっちゃね。

玄道の書いた書物の数は約七百巻もあります。
その中でも『皇典翼』『神典翼』の二冊は玄道の
学問に対する情熱がそそがれた書物があり、
日本の国学の上で大事な書物であると言われています。

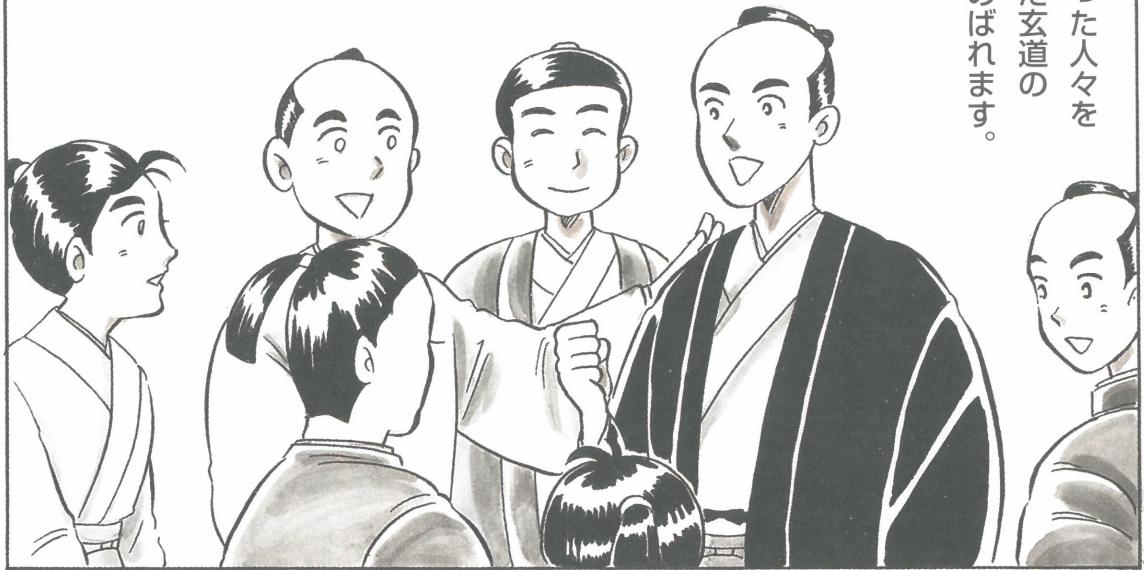
大洲市阿藏にある
矢野玄道のお墓の
入り口の左側には、小さな
社があります。



そこには矢野家代々の祖先が
まつられているほか、天皇や玄道の先生、
学問上の友人もまつられています。



世話になつた人々を
大切にした玄道の
人柄がしのばれます。



年号(西暦)

文政六年(一八二三)

天保十一年(一八四〇)

弘化二年(一八四五)

嘉永五年(一八五二)

安政二年(一八五五)

慶応三年(一八六七)

明治十四年(一八八二)

明治十九年(一八八六)

明治三十年(一八八七)

主な事がら

壹多郡阿藏村有松(現在の大洲市)に生まれる

松山の日下塾に入門する

京都の順正書院という塾に入門する

皇学所をつくる願いの文書を出す

『皇典翼』を書き始める

「献芹簷語」という意見書を政府に差し出す

歴史を調べるために全国に旅に出る

『古史伝』を完成した後、大洲に帰る

阿藏村有松の家で亡くなる

(六十五歳)



矢野玄道年譜

